

番号	6	事業名	総合流域防災	市町村名	飯田市	路河川名	(一)新戸川	箇所名(ふりがな)	飯沼(いぬま)	
事業計画時の課題・背景及び事業経緯	<p>○平成12年11月、15年10月、16年12月、18年10月に新戸川推進協議会及び地元より要望があった。</p> <p>○当河川は、飯田市街地近郊を蛇行し、天竜川へ流れ込む河川である。沿川に人家及び耕作地が連担しており、昭和36年、58年に水害が起きている。このため河川改修により水害から人命、財産を守るため、継続して治水対策を実施する必要があった。</p> <p>○平成15年、16年、17年、18年に新戸川推進協議会、地域住民に対して、新戸川改修事業について説明会を開催した。また、平成18年、19には現地にて関係者に説明を実施している。</p>					②事業実施に伴う自然環境・生活環境等の変化	事業実施に伴う自然環境・生活環境等の変化(A:環境がよくなった B:大きな影響なし C:影響が大きい)		評価	
	<p>○30年に1回程度の確率で発生すると予想される降雨により生ずる洪水(天竜川合流点で1秒間につき60立方メートル)に対し、河道拡幅により流下能力の確保を図り、飯田市内郷地区において家屋等への浸水被害を防止し、資産を守る。</p> <p>○平成18年度に、買収用地が減るように地元の自治会および地元関係者を交えて協議を行った。その結果護岸勾配を1:1.5から1:0.5に変更し、余裕高も含めブロック積とし、用地買収幅を減少させ、コスト削減を図った。</p> <p>○自然を活かした川づくりを目指し、現況の三面張り水路形状を、河床底面のコンクリート化を行わず、かつ河床幅を広くするとともに、護岸は環境保全ブロックを採用した。</p>						<p>○護岸に植生が繁茂可能なタイプのブロックを使用したことにより、在来種(芝系)の植生の回復を確認することができた。</p> <p>○河床に現地発生材の石を設置し、ふちを造成したことにより、生息する魚類等の保全が保たれている。</p> <p>○水がきれいになり、魚やシジミが増えたという地元からの意見をいただいた。しかし、ホタルがいなくなったという意見がある。</p>	B		
事業目的	<p>○30年に1回程度の確率で発生すると予想される降雨により生ずる洪水(天竜川合流点で1秒間につき60立方メートル)に対し、河道拡幅により流下能力の確保を図り、飯田市内郷地区において家屋等への浸水被害を防止し、資産を守る。</p> <p>○平成18年度に、買収用地が減るように地元の自治会および地元関係者を交えて協議を行った。その結果護岸勾配を1:1.5から1:0.5に変更し、余裕高も含めブロック積とし、用地買収幅を減少させ、コスト削減を図った。</p> <p>○自然を活かした川づくりを目指し、現況の三面張り水路形状を、河床底面のコンクリート化を行わず、かつ河床幅を広くするとともに、護岸は環境保全ブロックを採用した。</p>					③施設の維持管理状況	施設の維持管理状況(A:地域の人たちの参加あり B:適切 C:やや不十分 D:不適切)		評価	
	<p>○地元自治会によるゴミ拾いや草刈りの活動がある。しかし、地元からは植生部分が多く草刈りが大変であるとか、河床に敷き並べた自然石が歩きづらくゴミ拾いが大変であるという意見がある。</p> <p>○河川管理者が維持管理を実施している。</p>						<p>○地元自治会によるゴミ拾いや草刈りの活動がある。しかし、地元からは植生部分が多く草刈りが大変であるとか、河床に敷き並べた自然石が歩きづらくゴミ拾いが大変であるという意見がある。</p>	A		
事業概要	当初工期	H18~H23	費用対効果(当初時)	13.5	事業費(千円)	財源内訳(千円)				
	最終工期	H18~H23	費用対効果(評価時)	18.6	上段:当初/下段:最終	国庫	その他	県債	一般財源	
	当初計画内容(主な工種)	護岸工 L=140m			500,000	250,000	-	225,000	25,000	
	最終事業実績(主な工種)	護岸工 L=140m			362,500	181,250	-	163,125	181,125	
事業期間の延長、短縮理由と分析	<p>県道市場桜町線と交差する函渠工の施工にあたり、工事期間中の現場の交通規制方法について、地元との調整に不測の日数を要したため事業期間が1年延長になった。</p>					④地域住民等の評価	地域住民等の評価(A:評価が高い B:中程度の評価 C:評価が低い)		評価	
事業費(予算)の増加、縮減理由と分析	<p>○護岸勾配の変更により、用地買収幅を減少しコスト削減を図った。</p> <p>○スロープ式の落差工の植生には既設石積の発生材を再利用しコスト削減を図った。</p>						<p>○事業前は河川の水が溢れる恐れがあったが、今は豪雨時も安心していられるようになったと沢山の意見をいただいた。</p> <p>○水がきれいになり、赤魚(ウグイ)が増えたという地元からの声をいただいた。しかし、ホタルがいなくなったという意見もある。</p> <p>○地元自治会によるゴミ拾いや草刈りの活動がある。しかし、地元からは植生部分が多く草刈りが大変であるとか、河床に敷き並べた自然石が歩きづらくゴミ拾いが大変であるという意見もある。</p> <p>○安全・安心の声を多くいただくことができ、第一目的である洪水対策については目的が達成できた。</p>		A	
①事業効果の発現状況	事業効果の発現状況(A:目的を超えた達成 B:達成した C:概ね達成 D:達成したとはいえない)					評価				
	直接的効果(定量的・定性的)	<p>○河川の流下能力が、1.6m<sup>3</sup>/sから22m<sup>3</sup>/sに増加し、治水安全度が向上した。</p> <p>○保全対象である、家屋300戸、耕地等84ha、主要道路0.9km、郵便局、病院、公園、保育園、福祉施設の浸水被害が防止された。</p> <p>整備完了後の平成24年から平成28年の豪雨による出水では、浸水被害は発生していない。</p>					B			
		間接的効果(定量的・定性的) ※事業の主たる目的以外で地域社会への貢献状況	<p>○流域住民の安全・安心が高まった。</p> <p>○環境保全型護岸工による施工で河川環境が整備され、河川が本来有している良好な自然環境が復元された。</p>					部局意見	○事業区間の浸水被害を防止するために自然に配慮した工法を用いるとともに、治水安全度を向上することができた。	
	技術管理室意見		治水安全度の向上が図られ、事業の目的を達成している。				県の自己評価	○事業目的を達成		
改善措置の必要性						改善措置の必要性				○特になし